

激動の歴史を新しい視点から学ぶ日本近現代史

社会運動の展開

～社会運動家・荒畑寒村の青春とその時代～

I、はじめに～荒畑寒村という人物

- ①社会問題を可視化し、運動化するために…「ヨソモノ・馬鹿者・若者」
- ②荒畑寒村（1887～1981） 平民社時代以来の社会運動家、日本共産党・日本社会党の創設者
- ③荒畑少年が社会主義に目覚めるまで
 - 1) 日露戦争直前の横須賀海軍工廠のなかで
軍需産業の急拡張と労働者の大量動員、24時間フル操業⇒過労死と労災事故、火災の続出
2. 5倍増＝囚人・未成年・女性の動員
※戦争後の大量リストラと労働争議の発生
 - 2) 幸徳・堺『退社の辞』の衝撃

II、黎明期の社会運動と「平民社」

(1)黎明期の社会運動とその広がり

- ①労働問題・社会問題の発生
 - 炭鉱における劣悪な労働環境
 - 都市下層民の劣悪な環境
 - 製糸、紡績工場などでの争議の発生
 - 熟練工（職人）による同業組合⇒争議
 - 足尾鉍毒事件
- ②労働組合期成会（1897高野房太郎・片山潜ら）
 - アメリカでの労働組合の体験者・キリスト者
 - 熟練工・共済組合的色彩→自然消滅へ
- ③社会主義の紹介
 - 1901 社会民主党結成＝即日禁止へ
- (2)治安警察法（1900制定）＝労働・社会運動の弾圧法
 - ①政治活動の制限（とくに公務員・女性・未成年など）
 - ②労働・農民運動の制限＝組合結成・争議・ストを規制
- (3)足尾鉍毒問題
 - ①大洪水の頻発と有毒排水の拡散
1府5県，11万9千戸，51万7千人、10万町歩
健康被害⇒出生率低下と死亡率上昇など
 - ②対策として遊水池建設＝谷中村の廃村
 - ③被害者による大量上京請願（「押し出し」）と川俣事件
 - ④田中正造…国会での活動、直訴、谷中村寄留
 - ⑤知識人（木下尚江・幸徳秋水・荒畑寒村…）、学生などの支援

(4)平民社の設立と平民新聞発行（1903）

- ①1903年幸徳秋水と堺利彦『平民新聞』（週刊）創刊，発行所として平民社を設立
- ②平和主義（非戦論）と社会主義を主張、演説会・講演会の開催、地方遊説、冊子発行など

黎明期の社会運動関係年表	
1873	三池炭鉍紛争⇒暴動化 (1880ごろ～自由民権運動の高揚)
1883	三池炭鉍・高島炭鉍暴動
1886	甲府・雨宮製糸場の女エスト
1889	高島鉍の鉍夫虐待が問題化 大阪天満紡績職工賃上げスト 鉄工の同盟進工組結成
1891	足尾鉍毒事件深刻化 高野房太郎、米で職工義友会結成
1894	日清戦争（～95）
1896	名古屋・三重紡績職工エスト
1897	職工義友会「職工諸君に寄す」 普通選挙期成同盟会結成 労働組合期成会結成 鉄工組合結成・『労働世界』創刊
1898	日本鉄道機関士スト 社会主義研究会（⇒社会主義協会）
1899	横山源之助『日本の下層社会』
1900	治安警察法
1901	社会民主党結成、即日禁止 田中正造、足尾鉍毒問題を直訴

- 論説…非戦論・国際連帯・小国論「共産党宣言」・社会主義・移民・朝鮮併呑論・自由恋愛
- 世界の新聞…各国社会党動向・各国事情・婦人選挙権・仲裁裁判所
- 日本の新聞…工女の虐待・同盟罷業・戦時下の国民生活・物価・自殺者の数、部落問題
- 文壇・演壇 ○詩歌 ○小説
- 同志の運動 ○雑…伝道行商・遊説会・談話会・演説会・予はいかにして社会主義者となりしや

③財政難と思想的対立⇒1905年1月廃刊⇒後継の《直言》も無期限発禁⇒1905年10月解散

III、日露戦争下の国民と「非戦論」

(1)熱狂する？「国民」

- ① 戦勝祝賀行事などのイベント開催⇒「国民」としての一体感、「日本人」意識の高まり
- ② 非戦論やキリスト教徒への「露探」攻撃や、中国人や朝鮮人に対する差別と偏見拡大
- ③ 国民の戦争協力の強要

(2) 過熱するメディア…新聞・雑誌＝人々と戦争をつなぐ経路に

- ① 開戦前は主戦論・強硬論で開戦を煽る
- ② 戦況の速報・従軍記者のルポ、「号外」＝「人々は戦況を知り一喜一憂した。」
- ③ 新聞の変容…「政論新聞」から「民衆新聞」、結果として発行部数の急増

(3) 国民への負担の増大

- ① 増税 1) 間接税(塩タバコ砂糖) 2) 国税増加 3) 地方税の歳入減 ⇒物価上昇と生活関連の削減
- ② 内国債＝約6億円 一戸一戸にわりふり、戸別訪問で各戸に「勧誘」を
- ③ 寄付や協力要請 ⇒戦死者や出征者家族への義捐金・祝賀会・葬儀費用などを賄う。

(4) 戦争が引き起こす「悲劇」～広がる厭戦意識

- ① 戦死者・戦病死者・負傷者の大量発生
- ② 出征が引き起こした悲劇…出生兵の子殺し、徴兵逃れ、留守家族の崩壊・心中

※国民は「開戦派」だったのか？

「今日の状況にては国民の多数は心に平和を望むもこれを口外するものなく…少数の論者を除くのほかは内心戦争を好まずして而して実際には戦争に日々近寄るものの如し」(原敬日記 04/2/5)

(5) さまざまな非戦論(小松裕による分類)

- ① 階級的観点に立つ非戦論…平民社など
- ② キリスト教人道主義やトルストイ主義に立つ非戦論…内村鑑三※・木下尚江など
- ③ いのちの観点に立つ非戦論…田中正造※戦死者も鉋毒被害者も「非命の死者」
- ④ 肉親愛に基づく非戦論(厭戦論)…与謝野晶子「君死にたまふ事なかれ」、大塚楠緒子「お百度参り」
- ⑤ その他…宮武外骨「未亡人論」、二木りん子「一軒家」、矢部喜好の良心的兵役拒否

(6) 社会主義義道行商…東京～下関 小田頼蔵・山口孤剣 北関東 荒畑寒村

平民新聞と書物をつんだ箱車を引き、新聞読者やキリスト教会などを訪ね、社会主義の宣伝と行商を行う。谷中村や足尾銅山の労働者とも交流

IV、講和条約反対運動と動き出した民衆

(1) ポーツマス講和条約反対運動

- ① 9月5日、東京・日比谷公会堂で「講和反対国民大会」を開催
- ② 群衆が暴徒化⇒警察署や派出所・交番、国民新聞、内相宅、キリスト教会や市電なども襲撃・焼き打ちに
- ③ 戒厳令の発令、全国化も

(2) 反対運動の背景にある国民の不满

- ① 講和反対国民大会主催者の述懐

昨年のポーツマス条約の締結の報が伝わりました時分に、日本全国いずれの所にもモウ戦争は嫌になった、戦争で死ぬのは犬死であると云うような、実に不都合極まる、不祥極まる言語を聞きましたのであります。其当時吾々はこの言葉を聞いて非常に心配し、且つ非常に恐れました。国民が戦争に行くことに嫌になり、死ぬることが嫌になるというようなことでは、国の基礎というものが破壊せらるるといわなければならない。(小川平吉『嗚呼九月五日』)

- ② 条約に反対する「国民」の声

- ・戦費と兵卒は誰が出したんだ。
- ・これほど馬鹿らしきはなし。必ず敵に手向かいいたさず、第一番に俘虜になれ俘虜になれ!(傷痍軍人)
- ・兵役の召集は勿論、国債の募集にも忝ぜざる決議を致し候。
- 露探の好模範は誰が示したるぞ(某村有志)

- ③ 平民社がみた日比谷焼打事件…「強いて抑え来たれる怨恨の、戦争終結を待って破裂爆発したのみ」

- ④ 横浜での「講和賛成演説会」

※「日清・日露戦争の血の犠牲」という論理

(3) 靖国神社・護国神社・忠魂碑の思想

国家のため、天皇のための名誉ある死者として神格化

(4) 動き出した民衆～暴動事件の多発

- ① メディアとくに新聞が民衆運動を先導
- ② 背景にある不平不満と「息苦しさ」
 - ⇒ 正当化を付与する権威として新聞、
 - ⇒ 対象・方向性のあいまいさ(うっぶん晴らしの側面も)
- ③ 新聞(大阪朝日新聞)…営業方針としての「反権力」

動き出した民衆

～暴動事件の多発

- 1905 講和条約反対運動
(日比谷焼き打ち事件)
- 1906 東京電車値上反対運動
- 1908 増税反対市民大会
- 1912 第一次護憲運動
- 1913 対支問題国民大会
- 1914 シーメンス事件
- 1918 米騒動

V、社会構造の変化と「時代閉塞」～戊申詔書と大逆事件

(1) 社会構造の変化⇒多様な課題と要求の多様化

- ・財閥の出現⇒負債の削減
- ・都市の膨張・人口集中⇒食料・衛生・生活環境改善など都市政策の必要
 - ・旧中間層(「旦那衆」)の拡大⇒各種料金引下・営業税の軽減など
 - ・新中間層=俸給生活者・自由業(記者・弁護士)など
 - ・職工・貧民(「雑業層」)⇒労働者として雑業層との分離がすすむ
- ・地方名望家(地主など「旦那衆」)⇒地方の整備・開発(鉄道・道路・港湾)を期待
- ・一般農民(自作農・小作農)⇒地租削減・小作料軽減

(2) 方向性を見失なった日本…「世界の一等国」「文明国の一員」にはなつたが

- ① 国家目標の喪失…「坂の上」に立った日本⇒富国強兵をめざした時代の終焉、新たな国家目標は?
- ② 社会の変化、価値観の変化・多様化
 - ・産業革命の本格化・学校教育の定着・都市中心など
 - ・既成の価値観(「国家」「家」中心)への疑問と新たな価値観(個人主義・自由・平等…)
- ③ 強圧的な政治と「上から」の再統合=さらに「古い価値観」を強要
 - ⇒桂園時代(政党も藩閥・軍閥に取り込まれる)・戊申詔書など「上からの」民衆把握の進行
- ④ 社会の閉塞感の広がり 自殺ブームなど

(3) 「上からの社会運動」=国家による「上から」の国民再統合

- ① 国家への貢献度合いで人々を再編成=靖国神社・招魂社・忠魂碑、在郷軍人会、勲章
- ② 戊申詔書(1908)…「教育勅語」の成人版、価値観の多様性に対し「上からの価値観」を提示・強要
- ③ 地方改良運動…内務省が主導する地域の立て直し(⇒「報徳運動」の展開)
 - 財政難を地方に転嫁=地方の「自助」をもとめる
 - ・旧町村単位の慣習や財産(入会地など)を行政町村中心に整理・統合
 - ・米穀検査や蚕種統一など品質向上と生産増加
 - ・産業組合(⇒「農協」)による相互金融と共同購入・共同栽培
- ④ 「警察の民衆化」と「民衆の警察化」…青年団の整備・在郷軍人会⇒各種自警組織の整備
 - ※在郷軍人会=地域社会で生活している予備役・後備役の軍人を軍の下に組織化
 - ⇒地域のなかに軍隊を根付かせ、「草の根の軍国主義」化をすすめる
- ⑤ 国家・天皇に「敵対」する勢力の「非国民」化
 - 1900 治安警察法、1908 赤旗事件への厳罰対応、1910 大逆事件

(4) 赤旗事件から大逆事件へ

赤旗事件から大逆事件へ

- 05年「直言」無期発行停止に
平民社解散⇒幸徳、アメリカへ
- 06年1月日本社会党結党
⇒電車賃値上げ反対運動に参加
- 07年社会党大会直接行動論をめぐる紛糾
⇒結社禁止に
荒畑・谷中村取材⇒「谷中村滅亡記」
- 08年6月赤旗事件⇒荒畑入獄
⇒西園寺内閣崩壊、第二次桂内閣に
7月 幸徳、大阪和歌山を経て上京
- 09年3月幸徳、妻と離婚、管野スガと同居
⇒雑誌「自由思想」を発刊するが発禁
- 10年2月荒畑出獄
⇒5月幸徳・管野の殺害を計画
5月大逆事件開始⇒幸徳・管野ら逮捕
⇒荒畑、桂首相暗殺を計画
- 11年1月幸徳・管野ら12人処刑

- ① 日本社会党…1906年、結党された合法社会主義政党
 - ・「国法ノ範囲内ニ於テ社会主義」。をめざす
 - ・東京市電値上げ反対運動を展開、市民大会を開催。
 - ・アメリカから帰国した幸徳秋水がゼネストによる直接行動論を提唱、田添鉄二ら議会政策派と対立
 - ・1907年2月結社禁止

② 赤旗事件

- ・大杉栄、荒畑寒村らと警官隊との乱闘。
- ・大杉・荒畑・堺利彦・山川均・管野スガら16人が検挙、厳罰となった事件
- ⇒これをきっかけに西園寺内閣が崩壊。
- ⇒社会主義者への迫害の強化
- ⇒管野ら直接行動派の急進化

(5) 大逆事件

- ① 管野スガ、宮下太吉らの天皇暗殺謀議をきっかけとした社会主義者への大弾圧事件
- ② 大審院での非公開裁判で24名に大逆罪で死刑判決、うち幸徳・管野ら12名を処刑。
- ③ 幸徳が謀議に関係していたか疑わしく、他の21名はまったく無関係と思われる。

(6) 社会主義「冬の時代」の到来

VI、明治の終焉と新時代の社会運動に

(1) 1912年7月29日 明治天皇の死亡、大正と改元

- ①自粛ムードの広がりとなつた乃木大将の殉死
⇒漱石『こころ』「明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったような気がしました」
- ②添田知道⇒「フタのようなものがとれた」「ふしぎに世の空気が明るく。軽く感じてきた」
- ③明治（時代・天皇）への様々な思いと時代の抑圧からの解放感と新しい時代の期待感

教育勅語や戊申詔書などで「忠・孝・没我・義務」など伝統思想を国民に説いた明治天皇の死は、振り子を個人の権威、人格の尊重・主我・権利といった新思想の側に大きく傾けた。（坂野潤治）

(2) 第一次護憲運動と大正政変

- ①陸軍・藩閥のボスの横暴による西園寺内閣の「毒殺」に反対、
- ②数万の民衆が議院を包囲
- ③全国的な民衆運動と政党政治が結合することで（護憲運動）で閥族内閣を打倒
- ④新しい時代のはじまりと天皇の権威低下を強く印象づける

(3) 『白樺』と武者小路実篤

- ①『白樺』発刊(1910)…国家をものともせず「自分勝手なもの」=精神世界の華麗な展開を実現する
- ②武者小路実篤=強烈な自己肯定の精神⇒国家至上主義に対抗する

(4) 『青鞥』の発刊(1911)

- ①知識階級の若い女性による、女性自身による文学集団として発足。
⇒他によって生きる状態からの女性の解放、「潜める天才」の発揮を説く
- ②自らを「新しい女」として位置づける

新しい女はもはやしいたげられる古い女の歩んだ道を黙々として、はた唯々として歩むに堪えない。
新しい女は男の利己心のために無智にされ、奴隷にされ、肉塊にされた如き女の生活に満足しない。
新しい女は男の便宜のためにつくられた古き道徳、法律を破壊しようとしている。

(5) 友愛会の結成(1912)

- ①キリスト教社会改良主義の社会運動家の鈴木文治が労働者の共済修養団体として結成
- ②労働者の地位を改善するための穏健な労働組合により階級闘争の激化を防ぐことができると考える。
- ③『職工風情』と罵られる軽蔑を取り除くこと…労働者の低い自己認識の改善による地位向上を実現
- ④調停から、争議指導へと重点を改めていく。

(6) 普通選挙権獲得(普選)運動

- ①普通選挙権…納税額などの制限がなく、全員が一票の権利を行使できる選挙制度
- ②日清戦争後、民権運動の流れを引く人びとや社会主義者の中から発生
- ③第一次護憲運動(1912)やシーメンス事件(1913)をへて、要求拡大。
- ④1919~普選運動の高揚=広汎な層を巻き込むように。

(7) 「近代思想」(1912)~荒畑寒村らの再出発

- ①大杉栄と荒畑寒村が創刊した文芸や思想上の抽象的な問題を論ずる雑誌
- ②離散隠遁している同志が再起する中心を作る、「発行部数は少なかったが世間の受けは良かった」
- ③「齒に衣着せぬ偶像崇拜的な発言で文壇に新しい空気窓をもうけようとし…」
⇒1914年以降、社会運動を再開

VII、おわりに~以後の荒畑寒村

- ①第一次日本共産党創設に関与、コミンテルンへの使者としてソ連に向かう
- ②再建共産党に反対、堺利彦・山川均らと『労農』を創刊、非共産党系マルクス主義の立場で活躍
⇒1937年人民戦線事件で逮捕され、敗戦まで入獄
- ③戦後は日本社会党結成に尽力、衆議院議員2期、離党
⇒以後、主に著述業に従事。代表作、「寒村自伝」の評価は高い
1982年死去 93歳

「死なばわがむくろを包め戦いの塵に染みたる赤旗をもて」

モットー…理想主義・人道主義のない社会改革なんてつまらん

参考文献

『荒畑寒村著作集1・9(寒村自伝)』『週刊平民新聞(復刻版)』伊藤整編『日本の名著・幸徳秋水』
塩田庄兵衛『日本社会運動史』 隅谷三喜男『日本の歴史22大日本帝国の試練』
海野福寿『日清・日露戦争』 武田晴人『帝国主義と民本主義』 坂野潤治『近代日本の出発』
成田龍一『大正デモクラシー』 小松裕『「いのち」と帝国日本』『田中正造』 由井正臣『田中正造』
鹿野政直『大正デモクラシー』 松尾尊兌『大正デモクラシー』『大正デモクラシーの研究』
東海林・菅井『通史・足尾鉍毒事件1877~1984』 有山輝雄他『メディア史を学ぶ人のために』

